

ファッションプレートとその周辺

ファッションプレートはこれから到来するであろうファッション情報を伝えるための版画であった。繊維産業の発達と共に、18世紀末のヨーロッパ、特にフランスやイギリスを中心に登場し、市民階級の成長と共に爛熟していった。20世紀を迎える頃には、新たな情報伝達媒体に引き継がれ1920年代に消えていった。その推移をみるとファッションへの関心が一部の階級のものから、大衆のものへ変貌していく姿が分る。

ファッションプレートは突然登場したのではない。服装や儀式を描写した版画の存在があった。特権階級がファッションの発信源であった時代の貴族の肖像画はファッションの情報源でありファッションプレートの役目を果たした。

1770年にロンドンで「ザ・レディズ・マガジン」が創刊された。1778年から87年にかけてパリで「ギャラリー・デ・モード」が発行された。手彩色で彩られた版画はそれ以降のファッションプレートの原形になった。

19世紀中葉以降、ファッションプレート専業の原画家が登場してくる。その中にジュール・ダヴィットやコラン姉妹がいた。ジュール・ダヴィット（1808—1892）は1843年から約50年間、質の高い2600余枚のファッションプレートの原画を描き続けた。コラン姉妹は、19世紀のフランスロマン主義画家として知られているアレキサンダー・マリ・コランの娘エロイズ、アナイス、ローラの3人である。画才に恵まれ、それぞれファッションプレートの原画家として活躍した。

エロイズの次男モーリス（1853—1940）は1906年に服飾史協会を設立し、初代会長になった。1920年には彼の服飾コレクションをパリの歴史博物館に寄贈、それを母体に現在のパリ市立服飾博物館が誕生している。また、晩年には全12巻の『服飾の歴史』、および『服飾事典を』を編纂したことも知られている。アナイスの娘イザベル・デグランジェも母の才能を継承し、原画家として活躍した。

19世紀末になるとファッションプレートは衰退していった。しかし、ポール・ポワレは1908年にイリーブによる『ポール・ポワレの衣裳』を、1911年にルパーブによる作品集を発表した。それぞれ小冊子であったが、銅版画に手彩色されたファッションプレートは人気を呼んだ。その影響を受け、1912年に質の高いファッション誌「ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード」、「ガゼット・デュ・ボン・トン」、「モード・エ・マニユエル・ドージュルデュイ」が創刊された。この3誌は20世紀のファッションの方向に多大な影響を与えることになる。

20世紀に入ると有能なファッションプレートの原画家たちを数多く排出した。バルビエ、イリーブ、ルパーブ、マルタンらのイラストレーターの他に、フォーヴィスムの画家として名高いラウル・デュフィもまた、ファッションプレートを描いている。

1920年代には手彩色版画のファッションプレートは終焉を迎え、それに代わって印刷されたファッション雑誌が主流になっていった。このことはファッションを求める人が拡大し、ファッションが真に大衆のものになったことを意味していた。

本展は服装版画であるファッションプレートのルーツとも言える西洋古版画と共に、20世紀のファッション雑誌登場にいたるまでの18世紀末から20世紀初頭までのファッションプレートの魅力を展示する。